報告・資料

本学駅伝プロジェクトについての研究（第7報）
－発足時から箱根駅伝予選会10年間の推移と第100回箱根駅伝予選会のレース分析から－

武田　一[1]

A Study of Our University's Ekiden Project (Report No.7):
From the 10-Year History of Hakone Ekiden Preliminaries Since Its Inception and the Race Analysis of the 100th Hakone Ekiden Qualifying Event

TAKEDA Hajime[1]

キーワード：桜美林大学陸上競技部駅伝チーム、箱根駅伝予選会、レース分析

1　はじめに

本学駅伝プロジェクトは「大学および学園の一体感およびブランド力の向上を目指す（ONE TEAM）」ことをミッションとし東京箱根間往復大学駅伝競走（以下、箱根駅伝）初出場を目指し挑戦し続けている。第91回箱根駅伝予選会（2014年）に1年生だけのチームで初出場から10回連続出場し、最高順位は21位（第94回、第95回）である（表1）。個人では第94回（2018年）に田部幹也（健康福祉学群3年・出雲工卒、現ホシザキ陸上競技部）が本学初の箱根駅伝3区（関東学生連合チーム）を駆け抜け、その姿は日本テレビで真也加ステファン駅伝監督の取材VTRと共に全国ネットで放映された。また、関東学生連合チームには、第95回（2019年）永瀬孝（健康福祉学群2年・土岐商卒）、第97回（2021年）前山晃太郎（健康福祉学群4年・東京実業卒、現NDソフトアスリートクラブ）、第99回（2022年）に稲葉勇介（現 健康福祉学群3年・報徳学園）が選出された（3人とも本大会は補欠）。

こうした背景を鑑み、本報告書の目的は発足時からの10年間の推移と第100回大会[(1)]におけるレース分析を中心に箱根駅伝に出場するための方策を考察することである。

[1] 桜美林大学健康福祉学群准教授

なお、個人情報については関東学生陸上競技連盟、陸上競技関係掲載紙などにより一般に公開されている情報を使用し、本文に掲載されている研究対象者には、研究の内容及び方法等を説明し、理解を求めたうえ、個人情報（氏名）等が掲載される旨、同意を得ている。

2　発足時からの記録の推移

駅伝プロジェクトが発足した2013年当時、陸上競技部には長距離選手がおらず、真也加ステファン駅伝監督と武田一部長が全国を回り、選手のリクルーティングから始めるという、0からのスタートとなった。2014年に16名の新入生を迎え標準記録を突破し初出場を果たした。多くの新生チームは初年度10名以上の選手の確保が難しく出場に2年かかっているが，本学は1年生だけのチームということでメディアでも大きく取り上げられた。目標は「チーム記録を残すこと（10人以上完走すること）」「30番以内に入ること」とした。結果は29位（表1）と目標を達成し幸先の良いスタートであった。しかし、本大会に出場できる10位までの差は、52分03秒（図1）もあり一人当たり5分13秒も短縮しなければならないという途方もなく遠い目標であった。次年度以降は、順調に10位との差を徐々に縮めて2017年には10位まで17分51秒（1分48秒／人）となり、順位も21位と躍進した。

表1　予選会が国営昭和記念公園で開催されてからの記録の推移

大会	年	1位	10位	20位	本学	1位	10位	20位	出場校数	距離	コース
第77回	2000	10時間23分14秒	10時間36分04秒	11時間24分50秒	－	大東文化大学	国士舘大学	青山学院大学	30	20km	国営昭和記念公園周回
第78回	2001	10時間07分45秒	10時間18分43秒	11時間03分57秒	－	早稲田大学	国学院大学	国際武道大学	34		
第79回	2002	10時間10分20秒	10時間25分29秒	10時間55分51秒	－	東海大学	専修大学	流通経済大学	34		
第80回	2003	8時間37分50秒	8時間44分25秒	9時間24分30秒	－	法政大学	拓殖大学	国際武道大学	37	16.3km	注1）
第81回	2004	10時間09分07秒	10時間13分55秒	10時間44分44秒	－	早稲田大学	東京農業大学	慶應義塾大学	36	20km	国営昭和記念公園周回
第82回	2005	10時間10分17秒	10時間19分41秒	10時間53分34秒	－	東海大学	拓殖大学	国際武道大学	39		
第83回	2006	10時間06分53秒	10時間16分58秒	10時間51分30秒	－	早稲田大学	拓殖大学	立教大学	44		陸上自衛隊立川駐屯地～立川市街地～国営昭和記念公園
第84回	2007	10時間10分49秒	10時間16分38秒	10時間45分43秒	－	中央学院大学	法政大学	松陰大学	42		
第85回	2008	10時間13分20秒	10時間21分01秒	10時間42分08秒	－	城西大学	大東文化大学	麗澤大学	45		
第86回	2009	10時間03分39秒	10時間15分40秒	10時間30分32秒	－	駒澤大学	亜細亜大学	関東学院大学	47		
第87回	2010	10時間11分39秒	10時間27分35秒	10時間50分19秒	－	拓殖大学	法政大学	関東学院大学	36		
第88回	2011	10時間12分08秒	10時間19分39秒	10時間45分00秒	－	上武大学	順天堂大学	関東学院大学	40		
第89回	2012	10時間04分47秒	10時間15分28秒	10時間39分42秒	－	日本体育大学	拓殖大学	松陰大学	45		
第90回	2013	10時間04分35秒	10時間12分29秒	10時間31分23秒	－	東京農業大学	城西大学	麗澤大学	44		
第91回	2014	10時間07分11秒	10時間14分03秒	10時間35分49秒	11時間06分06秒（29位）	神奈川大学	創価大学	亜細亜大学	48		
第92回	2015	10時間06分00秒	10時間12分04秒	10時間31分20秒	10時間54分45秒（30位）	日本大学	上武大学	流通経済大学	49		
第93回	2016	10時間08分07秒	10時間16分17秒	10時間36分10秒	10時間41分04秒（25位）	大東文化大学	日本大学	明治学院大学	50		
第94回	2017	10時間04分58秒	10時間10分34秒	10時間26分32秒	10時間28分25秒（21位）	帝京大学	東京国際大学	亜細亜大学	49		
第95回	2018	10時間29分58秒	10時間46分27秒	11時間05分45秒	11時間06分16秒（21位）	駒澤大学	山梨学院大学	明治学院大学	39	ハーフマラソン（21.0975km）	
第96回	2019	10時間47分29秒	10時間56分46秒	11時間16分21秒	11時間30分55秒（28位）	東京国際大学	中央大学	東京経済大学	43		
第97回	2020	10時間23分34秒	10時間33分59秒	10時間46分38秒	10時間55分11秒（29位）	順天堂大学	専修大学	亜細亜大学	46		注2）
第98回	2021	10時間33分22秒	10時間45分41秒	10時間54分36秒	11時間09分33秒（29位）	明治大学	国士館大学	東京経済大学	41		
第99回	2022	10時間40分39秒	10時間48分55秒	10時間59分27秒	11時間08分23秒（27位）	大東文化大学	国士館大学	芝浦工業大学	43		
第100回	2023	10時間33分39秒	10時間37分58秒	10時間49分07秒	10時間53分27秒（26位）	大東文化大学	東海大学	筑波大学	57		

注1）第80回大会（2003）は箱根町芦ノ湖（16.3km）で開催

注2）第97回大会（2020）、第98回大会（2021）は新型コロナウィルス感染症対策のため陸上自衛隊立川駐屯地内飛行場の周回コースに変更（最高記録から除く）

□は最高記録

出所：著者作成。

その後、2019年は34分09秒差の28位と大きく後退。理由としては今まで順調に来ていたため、より高い目標を設定し今まで以上に練習の強度を上げたことによる選手の疲弊と怪我による主力選手の欠場が上げられる。その様な状況で臨んだレースは、昨年以上の目標を掲げたことでオーバーペースに陥り、加えレース後半、季節外れの暑さが重なり大幅なタイムロスにつながった。結果的には、チーム状況が悪いことを勘案し現実的なレースプランを準備するべきであった。加えて、前年度の3月に治郎丸健一コーチが突然退職したため、スタッフの補充ができず、真也加駅伝監督と武田部長の2人で選手の指導とリクルーティングを行った。そのため、手が回らない状況でありリクルーティングに大きな穴が開いてしまった。また、新たな強化大学（東京国際、駿河台、麗澤、日本薬科、芝浦工、武蔵野など）や伝統校（筑波、慶応、立教、専修、亜細亜、関東学院など）が奨学金を拡充、練習環境などの整備、予算の増加など大幅に強化に乗り出したことも本学が引き離される要因となった。なお、本学の予算は2018年から毎年減額されている。

その後、福永勝彦コーチが就任し選手の指導とリクルーティングを担当することで徐々に成果を発揮、2023年の第100回大会では初めて5㎞を15位で通過、10㎞で予選会通過まで1分33秒に迫ったことは大きな前進である。最終的には26位と順位を落としたが、10位まで15分29秒（1分33秒／人）差となり、本学が10年間で一番箱根駅伝に近づいた日となった。なお、10位との記録が縮まっているのに順位が上がらない要因は、2019年までは10位と20位の差が20分前後であったが、それ以降は10分前後へと大幅に縮まったことによる（各大学が大幅に強化に乗り出したため）。そのため、数分の差が順位の変動に大きく左右される。今後は、順位も大切であるが、予選会通過の10位との差をもっと意識すべきと考える。

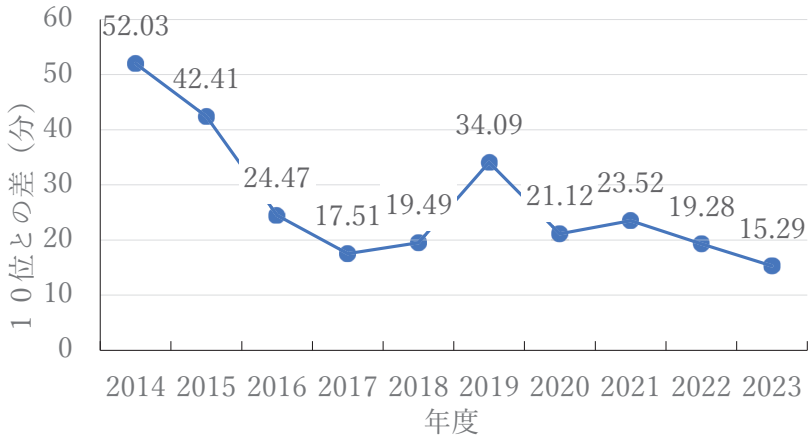

図1　10位（予選会突破）との本学のタイム差の推移

出所：著者作成。

表2　5,000ｍの上位10名の平均記録

年	上位 10名平均	1位	10位	13分台	14分 前半	14分 後半	15分台	予選会 順位	備考
2014	15.11.00	13.47.78	15.36.08	1	0	1	8	29	
2015	14.48.82	13.57.53	15.13.36	1	0	6	3	30	
2016	14.38.38	14.19.57	15.00.88	0	1	8	1	25	
2017	14.42.82	13.35.19	15.16.59	1	1	7	1	**21**	*
2018	14.46.48	13.35.18	15.12.38	1	1	5	3	**21**	
2019	14.42.54	**13.24.99**	15.07.23	1	0	8	1	28	*
2020	14.36.53	13.44.23	14.49.64	1	1	8	0	29	
2021	**14.28.87**	14.02.80	**14.44.50**	0	5	5	0	29	
2022	14.32.52	13.29.59	14.51.38	1	2	7	0	27	
2023	14.34.27	14.12.97	14.52.61	0	1	8	1	26	11/12現在

注）備考欄「＊」は留学生2名のうち上位記録1名を入れた（予選会には1名のみ出走のため）　　出所：著者作成。

5,000ｍの記録（表2）は発足当時（2014年）、上位10人の平均15分11秒00から2021年には14分28秒87と大幅（42秒13）に短縮している。2020年に初めて10人全員が14分台に入り、2021年は14分前半以内に最多の5名が記録した。2023年（10/1現在）は選手31名中18人が15分を切っている。また、2023年のデータはシーズン途中であり、5000mのレースに出場する機会が少ないためタイムが低いが、練習状況を換算すると2021年を大幅に上回る可能性が大いにある。

表3　10,000ｍの上位10名の平均記録

年	10平均	1位	10位	27分 台	28分 台	29分 台	30分 台	31分 以上	予選会 順位	備考
2014	31.45.80	30.04.26	31.43.38	0	0	0	1	2	29	3人
2015	32.03.89	30.13.68	33.39.55	0	0	0	2	8	30	
2016	30.53.51	29.22.82	31.32.93	0	0	1	3	4	25	*、8人
2017	30.22.14	28.14.79	30.56.67	0	1	1	8	0	**21**	
2018	30.28.64	27.43.53	31.37.19	1	0	1	5	3	**21**	
2019	30.20.46	27.45.62	31.02.99	1	0	1	6	2	28	*
2020	**29.57.21**	28.14.13	31.06.79	0	1	4	5	0	29	
2021	30.06.35	29.10.58	**30.41.23**	0	0	4	6	0	29	
2022	30.08.25	**27.29.92**	30.59.63	1	0	3	6	0	27	
2023	30.03.06	28.01.88	30.43.04	0	2	0	8	0	26	10/1現在

注）備考欄「＊」は留学生2名のうち上位記録1名を入れた（予選会には1名のみ出走のため）。

ハーフマラソンとより相関の高い10,000mの記録（表3）については、発足当時（2014年）は競技力が低かったため3名しか競技会に出場できなかった。翌年の2015年に10人以上出場し32分3秒89から2020年には29分57秒21と2分6秒68短縮した。2016年に初めて29分台で1名、2020年には29分以内に最多の5名が記録した。2023年は初めて日本人で29分を切る選手が現れた。現在、30分前半で走る選手が多くいるため、2020年を大幅に上回る可能性が大いにある。

3　第100回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会 本学の結果

第100回予選会（2023年10月14日）は自衛隊立川駐屯地内→立川市内→昭和記念公園と昨年同様、従来のコースとなった。コース特性としては、滑走路でのスタートから駐屯地内を3周（約8km）は滑走路の真っ平らな平坦なコースに最多665人の選手（参加校57校は最多）が密集して走るためハイペースとなりオーバーペースとなる可能性がある。また、接触による転倒も予想される。そのため、いかに選手自身がコンディションを把握しペースコントロールをしなければならない難しさがある。駐屯地をでて立川市内の平坦なコースを約6㎞経て昭和記念公園内の起伏のあるコースを約7㎞走る。昭和記念園内の15 ～ 20㎞でペースを維持し大幅なタイムロスをしないことがチーム順位の鍵となる。また、17㎞先にきついUタウンがあるため足を滑らし転倒する選手が毎回いるため要注意箇所である。

レース当日の気象条件は、午前9時現在15.8℃、北東の風1.3m、薄曇りの稀に見る絶好の気象条件となり、ハイペースとなることによる好記録が予想された。

ハーフマラソンとなった第95回大会以降で、自衛隊立川駐屯地内にて開催された第97、98回大会を除く大会と比較すると、今大会の1位は第95回大会（駒澤大学）につぐ2番目の記録であったが、10位は1位と4分17秒差、20位は10位と11分09秒差となる過去最高記録となった。このことから、20番目以内に入るのも熾烈な争いとなっていることが分かる。本学は26位と前年度から1つ順位を伸ばした。総合タイムは10時間53分27秒、前年度から14分56秒大幅更新する本学最高記録であった（表1）。また、10位とのタイム差は15分29秒と過去最短となった（図1）。今回は100回の記念大会であるため本大会出場権の13位（山梨学院大）とのタイム差は13分47秒と本学が最も箱根駅伝に近づいた大会であった。

個人成績（表4）については、エースのNELSON MANDELA（GC2年）以外、11人全員が自己記録を更新した。MANDELAは6月に交通事故にあい（右肩鎖骨脱臼）、全く走ることができず出場が危ぶまれていた。8月からようやくジョギングができるようになり何とか出場にこぎつけた中、10ｋｍを28分35秒で通過し先頭集団についたことは称賛に値する。練習不足のため後半失速するが、失速率（スタートから5㎞までと15㎞から20㎞までの5㎞区間を比較し増加率を失速率とした）を8.3％に抑えれたことは長距離選手としての非凡な才能を感じた。昨年、日本人トップで10,000m 28分台をもつ稲葉勇介（健福3年）

と29分台の島津太一（健福2年・報徳学園）を怪我と体調不良で欠場したことは大きなマイナス材料となった。しかし、志村紘佑（健福2年・相模原光明）が64分27秒（168位：関東学生連合チーム選出相当）、佐藤亘（健福2年・手稲）が64分59秒と65分を切り（二人とも関東学生陸上競技対校選手権大会の標準記録を突破）、新しい選手が躍動してくれた。加えて、10ｋｍを自己記録で通過した選手が6名、ほぼ自己記録が3名と力をつけて積極的な走りをした。

失速率からみると、3.2％で押さえ15㎞からペースアップした志村のレースは予選会通過のお手本であった。また、田部智暉（健福3年・出雲工）は10㎞を自己記録で通過しながらも4.0％と抑え走り切ったことは、練習の成果を十二分に発揮できたと考える。失速率10％以下が10名、平均6.0％は本学の最高記録であった。ようやく、箱根駅伝にチャレンジできる長距離選手としてレースをコントロールする技術を得られてきたと考えられる。

表4　第100回東京箱根間往復大学駅伝競走大会予選会 通過タイムと失速率（2023年）

順位	名　前	5km	10km	15km	20km	21.0975km	/km	失速率
26	NELSON MANDELA	14.16	28.35	43.49	59.16	62.32	2.58	8.3%
	lap		14.19	15.14	15.27	3.16		
	/km	2.52	2.52	3.03	3.06	2.59		
158	志村　紘佑	14.59	30.15	45.49	61.13	64.27	3.04	3.2%
	lap		15.16	15.34	15.24	3.14		
	/km	3.00	3.04	3.07	3.05	2.57		
218	佐藤　亘	14.57	30.16	45.52	61.35	64.59	3.05	5.2%
	lap		15.19	15.36	15.43	3.24		
	/km	3.00	3.04	3.08	3.09	3.06		
239	富永　恭平	14.57	30.15	45.56	61.51	65.14	3.06	6.5%
	lap		15.18	15.41	15.55	3.23		
	/km	3.00	3.04	3.09	3.11	3.05		
285	田部　智暉	15.15	30.42	46.29	62.20	65.43	3.07	4.0%
	lap		15.27	15.47	15.51	3.23		
	/km	3.03	3.06	3.10	3.11	3.05		
298	武下　孝輔	15.13	30.33	46.16	62.26	65.50	3.08	5.2%
	lap		15.20	15.47	16.00	3.24		
	/km	3.03	3.04	3.10	3.12	3.06		
303	高橋　拓海	15.14	30.31	46.25	62.25	65.53	3.08	6.1%
	lap		15.17	15.54	16.00	3.28		
	/km	3.03	3.04	3.11	3.12	3.10		
317	荒木　玖仁	15.14	30.41	46.29	62.39	66.03	3.08	6.2%
	lap		15.27	15.48	16.10	3.24		
	/km	3.03	3.06	3.10	3.14	3.06		
335	高木　優輔	15.06	30.10	46.22	62.50	66.19	3.09	9.1%
	lap		15.04	16.12	16.28	3.29		
	/km	3.02	3.01	3.15	3.18	3.11		
347	塚田　雄大	15.16	30.49	46.48	62.58	66.27	3.09	5.9%
	lap		15.33	15.59	16.10	3.29		
	/km	3.04	3.07	3.12	3.14	3.11		
402	森岡　佑成	15.08	30.39	46.45	63.35	67.16	3.12	11.3%
	lap		15.31	16.06	16.50	3.41		
	/km	3.02	3.07	3.13	3.13	3.22		
432	塩﨑　滉大	15.15	30.53	47.07	64.37	68.04	3.14	10.2%
	lap		15.38	16.51	16.53	3.27		
	/km	3.03	3.08	3.23	3.23	3.09		

注）「lap」：5kmごとの区間記録、「/km」：1kmに換算した平均記録、「失速率」：スタートから5kmまでと15kmから20kmまでの5km区間を比較した増加率表4 第100回東京箱根間往復大学駅伝競走大会予選会 通過タイムと失速率（2023年）

出所：著者作成。

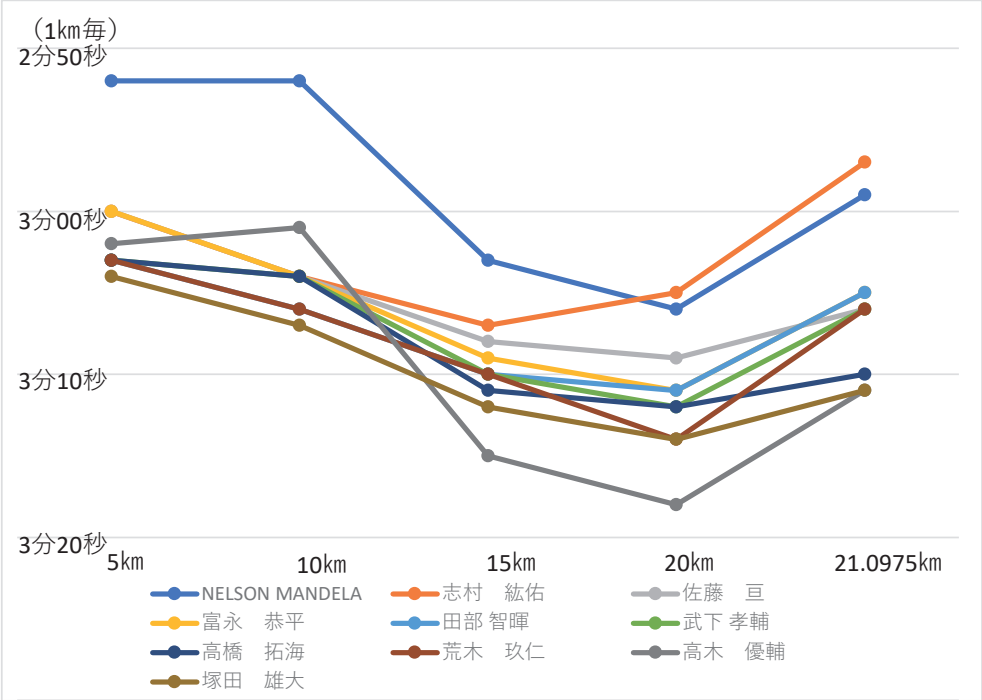

図2　区間（0-5 km、5-10 km、15-20 km、20-21.097 km）ごとの速度の変化（2023年）

出所：著者作成。

以下、本学のレース分析（表4，図2）をしていく。今回のレースの目的は、前半、予選会突破を狙える順位で通過し、後半粘って練習の成果を出すことであった。それは、これからも続く箱根駅伝への挑戦の足掛かりにするためである。目標は、5kmを15分00秒、10kmを30分30秒で通過し、後半は粘って総合成績で20位以内に入ることであった。この目標設定は10,000mの自己記録が30分台の本学の選手にとってはかなり高いハードルであるが、それに向けての準備をおこなっていた。その準備とは、夏の白馬合宿においてじっくり足を作り後半粘れるスタミナづくり、9月24日に行われた第10回絆記録挑戦会の10,000mでは予選会を想定したタイムで5,000mをハイペースで入り粘るレースをおこなうことなどであった。第10回絆記録挑戦会において多くの選手が自己新記録を更新したことは大きな自信となった。

結果は5kmを予定通り15分00秒前後（14分57秒～ 15分16秒）で通過しチーム順位は15位、選手たちは皆、大集団の前方で走っていた。10kmではタイムを徐々に落としたが予選会通過ラインまで1分33秒（21位）に迫る記録であった。また、10人が31分を切って通過したことは初めてのことであった。後半は前半のハイペースの影響で少しづつタイムと順位を落としたが15km ～ 20kmで大きく失速せず1kmを3分20秒ペースまで10人が落とさなかったことも初めてのことであった。加えて、最後の1.0975ｋｍを10人がペースを上げてゴール

したことも初めてのことであった。以上から20位以内という目標は達成できなかったが、目的と前半の目標は十分に達成できたと評価できる。このことは、次年度以降につながる大きな経験として残ると考える。

5　おわりに

2013年4月から始まった駅伝プロジェクト箱根駅伝への挑戦は10回目を終えた。本チームの目的である「応援されるチーム」としては、今夏、白馬シーズンキャンパスでの合宿において庭先に「がんばれ！桜美林目指せ箱根」と横断幕を掲げていただいた方や自宅前まで出てきていただき応援していただいた方々、大学裏の尾根緑道での練習中や予選会で「桜美林！頑張れ！」と声援していただいた方々がとても増えてきたことも少しずつ達成してきたと思われる。また、予選会後、選手から「こんなにも応援していただいていたとは思わなかった。励みになった」とのコメントも聞かれた。

今回はこの10年間で初めて練習も集団でゴールし、途中で落ちていく選手も少ない良い状態でレースに臨むことができた。MANDELAが万全でなかったことと主力選手2名を欠けたこととは大きなタイムロスであったがそれを皆の力でカバーできたことは、レース後の選手たちのやり切った姿がそれを物語っていた。

今回、10名の選手構成は4年生2名、3年生1名、2年生7名であり、4年生は6,10番目、3年生は5番目と主力は2年生という若いチームであった。10年前52分差もあった差がようやく15分まで縮めることができた。しかし、多くの大学が強化に取り組んできている中、箱根駅伝予選会は数秒で落選する熾烈な争いとなってきている。

第98回大会まで様々な失敗をし、第99回大会においてようやく自分たちの力を発揮するレースプランができ、そして今回、箱根駅伝に出場するためのチャレンジを試みた。学生たちが決めた2024年のチームスローガンは「雲外蒼天」（困難を努力して乗り越えた先には、明るい未来がある）。2023年のスローガン「不撓不屈」（強い意志を持って、どんな困難にもくじけないさま）のもと戦ってきた学生たちは、その先の未来をイメージして、これから続く後輩たちの未来を思って1年間過ごしたいと語っていた。10年前、予選会通過まで52分差もかかっていたチームとは思えないほどの成長である。多くの先輩たちの築いた道のりをこれからもオビリンスピリットを胸にチャレンジして欲しい。

最後に、この駅伝プロジェクトを支援いただいております学園関係者の方々、近隣市民の皆様、夏合宿を行っている白馬村の皆様に感謝いたしております。

注

(1) 東京箱根間往復大学駅伝競走予選会は第95回以降、世界の陸上競技動向により20㎞からハーフマラソン（21.0975㎞）に変更している。コースは陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし立川市街をとおり国営昭和記念公園をゴールとするロードレースである。第97、98回は新型コロ

ナ感染症対策として、陸上自衛隊立川駐屯地の滑走路の周回コースに変更された。箱根駅伝への出場は上位10名の合計タイムが少ない10位以内の大学である。距離の変更に伴い選手の出場資格は10,000m（34分以内）のみとなったが、第97、98回は新型コロナ感染症のため競技会が減ったことによる救済処置として5000mを16分30秒以内も可となった。その公認記録をトラックで有する者がエントリーできる。エントリーは10名以上14名以下とし出場人数は10名以上12名以下である。第100回大会は記念大会として、出場校を3校増やし予選会から13校（但し、関東学連連合チームは廃止）とした。加えて、参加校を従来、関東学生陸上競技連盟に所属する大学のみから全国の大学とした（関東以外は、11校参加）。

参考文献

武田一（2013）「本学駅伝プロジェクトの取り組み」『桜美林論考「自然科学･総合科学研究」』第5号，95-111，

武田一（2014）「本学駅伝プロジェクトの取り組み（新チームの発足）」『桜美林論考「自然科学・総合科学研究」』第6号，15-27

武田一（2015）「本学駅伝プロジェクトについての研究（第1報）（第92回箱根駅伝競走予選会のレース分析から）」『桜美林論考「自然科学・総合科学研究」』第7号，61-72

武田一（2016）「本学駅伝プロジェクトについての研究（第2報）（第92回箱根駅伝競走予選会のレース分析から）」『桜美林論考「自然科学・総合科学研究」』第8号，25-36，

武田一（2019）「本学駅伝プロジェクトについての研究（第3報）（発足からの5年間）」『桜美林論考「自然科学・総合科学研究」』第10号，1-15，

武田一（2021）「本学駅伝プロジェクトについての研究（第4報）（近年の予選会動向と第95回、第96回箱根駅伝競走予選会のレース分析から）」『桜美林大学研究紀要「総合科学研究」』第1号，158-166

武田一（2022）「本学駅伝プロジェクトについての研究（第5報）（発足時からの5,000mと10,000mの記録の推移と第97回箱根駅伝競走予選会のレース分析から）」『桜美林大学研究紀要「総合科学研究」』第2号，234-242

武田一（2023）「本学駅伝プロジェクトについての研究（第6報）（発足時からのリクルーティング状況と第98，99回箱根駅伝競走予選会のレース分析から）」『桜美林大学研究紀要「総合科学研究」』第3号，249-259

関東学生陸上競技連盟、大会情報、http://www．kgrr．org/　（2023年10月26日現在）